

主 題：私たちは主を宣べ伝える 4

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章26-31節

人間の知恵によって救いへと導かれることは絶対にはないと、それがパウロのメッセージでした。なぜ、パウロがこのメッセージを繰り返してコリントの教会に語ったのか？救いに与った者たちの中に、救いにおいて人の知恵を重んじるという人たちが起こって来たからです。そこでパウロは、人間の知恵の無力さ、虚しさを改めて教えていくのです。

A. 神の恵みによる救い：人の知恵によるのではなかった 19-25節

すでに私たちが見た19-25節でパウロは、救いは100%神の恵みであると教えました。ですから、この24、25節で、神の力・知恵と人間の力・知恵を対比して、人間の知恵の愚かさを説明しました。人の知恵は人の本当の必要、救いを教えることにはない、どんな知恵をもっている、それが私たちに救いへと導いていくことにはないと言います。また、神の真理を悟らせることもないと言います。

神の知恵は人の本当の必要を教え満たしてくれます。人間の力は人を変えることも救うことも出来ないけれど、神の力は人を根本から造り変えて、一番必要な救いをもたらすのです。皆さんもよくご存じのⅡコリント5：17には「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」とあり、神は私たちに全く新しく造り変えてくださる、その力を神はお持ちだということです。

今日、私たちが見ていこうとしている1：26からは、救いは神の選びによるということをパウロは教えます。

B. 神の選びによる救い 26-31節

人の知恵によるのではない、神の選びによってあなたは救いに与ったのだと、そのことを教えます。

1. 神の選び 26-28節

1) その意味 26a節

26節「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。…」、神の選びのことを言います。こうしてパウロは、救いは神の恵みであるということを改めてここから教えていこうとするのです。

・「召し」：26節に記されている「召し」という名詞は「召された」という動詞に由来しています。24節にも「しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」と、「召された」ということばがあります。これは形容詞です。「神に招かれる、召される」ということです。これも26節と同様に「召された」という動詞に由来しています。

ですから、1章には「召し」ということばが繰り返し使われていることに気付かれるでしょう。9節を学んだことを思い出してください。「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」と、「召し」によって救われたのだとパウロが教えたのです。この9節の「お召しによって、」とは「呼ぶ、呼び寄せる、招待する、呼び寄せる」ということですが、このときに私たちは「有効証明」という神学用語について学んだことを思い出されると思います。「有効証明」、まさにそのことがここで教えられています。

「有効証明」＝霊的に盲目であり、神の真理が全く理解できない我々が、救われるためには神による何らかの働きが必要である。この神の働きのことを「有効証明」と呼ぶのである。

つまり、私たちはどんなに努力をしても、どんなにIQが高くても、どんなに人々から「この人には知恵がある」と言われとしても、人間の知恵によって神を知ることは有り得ない、神が働いてくださったから私たちはそれを知ることになったと。その神の働きをこのように「有効証明」と言うのです。

恐らく、今学んでいることを的確に説明しているのがⅡテモテ1：9です。「神は私たちに救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」と、まず、「神は」ということばがあります。だれが私たちに救ったのかを明確に記しています。私たちに救ったのは「神」です。神がイニシアティブを取って救いを私たちのうちに達成なされたのです。

「また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、」、だれが？「神」です。「それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。」と、こうしてみことばは明確に私たちが救いに与ったのは神が働いてくださったからであり、神が招きをもって私たちに召してくださいましたからであり、それは私たちの働きとは全く関係のないもので、すべて神ご自身の計画と神ご自身の恵みによるものだと、みことばは教えています。まさに、パウロがここで教えたことをコリント教会にも教えるのです。

イエスもこのことを教えています。ヨハネの福音書6：44「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」、この「引き寄せ」ということばは新約聖書に8回出て来ますが、「心を促して導く、引き寄せる、連れ出す、呼び寄せる」という意味です。つまり、イエスは「神があなたを呼び寄せられない限りあなたは救いに至ることはない」と言われたのです。ということは、クリスチャンである皆さんはこういことが言えます。神があなたを呼び出してくださった、神があなたを召してくださったということです。

そうすると、皆さんが良くご存じのヨハネ15：16「あなたがたがわたしを選んだではありません。わたしがあなたがたを選び、…」、「わたしがあなたがたを選び、」と神があなたを選んだからあなたは救いに与ったのだということです。主が働かれる人は救いへと導かれるのです。ですから、「有効証明」というのは「選ばれた人が神に対して正しく応答できるように働く」ことです。ここにおられるイエスの救いに与っている皆さんはみな例外なくこの召命を受けたのです。

「有効証明」というと非常に堅いのですが、実際に、神はどのように罪人のうちに働かれるのか？もつとと言うなら、どのようにあなたのうちに働かれたのか？三つのことがあります。それを私たちはどうしても覚える必要があります。ぜひ、このことを学びながらご自分に問い掛けてみてください。このような働きがあなたのうちに為されたのかどうかです。

***神がどのようにあなたのうちに働かれて救いへと至らせてくださったのか？**

(1) 本当の自分の姿を知る

あなたは自分自身のことを正しく理解します。なぜなら、神はあなたのうちに働いてあなた自身の本当の姿をあなた自身に示して下さるからです。これまで、私たちは人と比較する生活を送って来ました。あの人に比べて成績がいい、運動や計算などの能力が自分にはある、家系がいい、財産がある、知名度が高い、好感度が良い、友達の数が多い、スタイルや外見が優れているなどと、いつも自分とだれかを比較していました。しかし、神が心に働かれると、このような人との比較ではなく自分の本当の姿、その醜さをその人に示しその人にそれを悟らせるのです。

聖霊なる神の働きはイエスが言われたように「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」(ヨハネ16：8)です。つまり、聖霊なる神が来ると私たちがいかに神の前に規格外なのか、神の道から外れているのかそのことを私たちに悟らせてくれるのです。心がどれ程汚れているのか…、神が忌み嫌われる汚れた思いが心から頻りに湧き上がって来るだけでなく、それらを自分自身で求めていたり、心に歓迎している自分の姿です。私たちが本当に罪を憎んでいるなら私たちは罪から離れるでしょう。でも、私たちが知ること、明らかにされることは何か？私たちは罪を愛しているということです。イエスを信じた後も、自分の醜さを神はとことん示して下さるからです。私たちの心の中にそのような汚れた思いがあるだけでなく、私たちの行動がいかに汚れたものであるかを神は示して下さるのです。

それは見えるところでの行動だけでなく、だれも見えていない隠れたところで自分が好んで行っているだれにも知られたくない行動です。だれも見えて欲しくない、でも、私たちがどんなものを好んでいるのか、どんなことを隠れたところでやっているのか、いかに私たちが聖い神の前に立つ資格の全くない、心においても行ないおいても汚れ切った者であること、神はそのことを私たちに明らかにしてくれるのです。エレミヤが言った通りです。エレミヤ書17：9「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」と。良いことをしようと心がけてみてもそれを実践することができない。したとしてもごくわずかで直ぐに私たちは罪に逆戻りしてしまう。「何と私は汚れた者か、何と私は神の前に立つ資格のない者か…」。

ですから、神が先ず私たちのうちに働くときに、一信仰者の皆さん、神はこのような働きをあなたのうちに為されたはずです—本当の自分の姿を、神がご覧になっているあなたの姿をあなたに示して下さるのです。私たちはそのことによって自分は救いに値しない存在だということに気付くだけでなく、同時に、自分には自分を救う力がないことも悟らせて下さるのです。エレミヤがこのようにも言います。エレミヤ13：23「クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。」、当然、この答えは「できません」です。「もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行うことができるだろう。」、つまり、皮膚の色を変えることもできない、ひょうの斑点を変えることもできない。ということは、あなた自身も悪から完全に離れることができない、自分を変えることができない。ですから、自分のその醜さに気付いたときに私たちは嘆き悲しむのです。自分の存在が余りにも神の規格外であることを。

でも同時に、私たちが努力をしたらそれから解放されるかということもできません。どんなに努力をしてもどんなに心を入れ替えても自分を変えることはできない。神の基準に到達することはできない。そうすると自分が永遠の地獄に向かっていることに気付くだけでなく、自分はその永遠の滅びから

抜け出す力がないこと、自分はどう頑張っても永遠の滅びから抜け出す術がないこと、救いについての希望がゼロであること、そして、私たちはただ自分にふさわしい永遠のさばきを、その地獄をただ待つしかないのです。そのように神は私たちに働いて私たちに本当の姿を示してくださるのです。救いに与っている皆さんは必ずその所を通ったはずです。

(2) 本当のキリストを知る

イエスがいったいで何を為さったのかを悟らせてくれます。創造主なる神である主イエスがこの世に人として来られ、そして、あなたや私が受けるべき罪をさばきを主が身代わりとなって十字架で受けてくださった。そして、その死から敢然と肉体をもって三日後によみがえることによって、イエスが教えておられた教えだけでなく、ご自身が確かに神であり救い主であることを証明してくださった。信仰者の皆さん、あなたの罪をご存じである神があなたの罪を赦し永遠のさばきから救い出すために、神ご自身があなたの身代わりとなってあなたが受けるべき神のさばきを代わりに受けてくださった。あなたや私が受けるべき神の怒りを神ご自身が受けてくださった。このようなみわざを主が為さったのです。

私たちが思い出さなければならないのは「主ご自身がお受けになられたあの辱めも、力強く振り下ろされたムチにより毎回飛び散る肉片、また血潮、悶絶さえできずに耐えられた39回のムチ、そして、手と足に打ち込まれた太い釘、また、その釘にのしかかる自らの体重により裂ける手足の肉。これらの苦痛は全て私に代わって味わってくださったものだった。」です。さばき主である神があなたや私のさばきを受けてくださったのです。そのことを神は私たちに明らかにしてくださった。私たちが思うことは「なぜ神さま、こんなにも私を愛してくださるのですか？なぜこんな私のためにこのような犠牲を払われるのですか？いったい、私のどこにこのようなすばらしいご愛を受ける資格があるのですか？私にふさわしいものは永遠の滅びです。なぜなら、あなたに逆らい続けて来たから…。なぜ、こんなに大きな犠牲を、しかも私のために払ってくださるのですか？」と、神がそうして私たちの心の中にイエスが何をしてくださったのか、そして、この十字架で身代わりとなってくださったのがだれだったのか、そのことを明らかにされたことによって私たちはただ「主よ、どうか、こんな愚かな罪深い私を赦してください。」と叫ぶばかりです。このようにして神は働かれるのです。自分の罪深さだけでなく、自分に対する神の愛を示してくださり、それを分らせてくださるのです。

(3) 新しい心をくださる

主が働かれたときに、私たちは福音のメッセージを何回も聞いて来ているかもしれないけれど、ある時、私たちは聞いたその福音のメッセージを信じたいと思いました。なぜなら、神ご自身が私たちのうちに新しい心をくださったからです。皆さんに思い出していただきたいのは、イエスが二人の犯罪人と一しょに十字架にかかったときです。この二人の犯罪人は最初からイエスに対して好意的ではありませんでした。彼らはイエス・キリストに悪口を言いました。ルカ23：39「十字架にかけられていた犯罪人のひとりイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを教え」と言った。」、この時に、もうひとりの犯罪人が悪口を言っていた犯罪人をたしなめています。十字架に架かったときには彼らはいっしょになってイエスをののしっていたのに、6時間の間にこのひとりの人物のうちに何かが起こったのです。

40-43節をご覧ください。「:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」、この人物に何が起こったのですか？彼はバイブルスタディに出た訳ではありません。彼は神に逆らう者として、しかも世において十字架で処刑されるような罪を犯して十字架に磔にされた訳です。

当初は二人ともイエス・キリストに悪口を言っていたのです。ところが、そのうちの一人に何か変化が起こるのです。彼が言ったことは「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。」でした。お気づきになりましたか？この人物は十字架の上で、自分が十字架に値する罪を犯したことに気付いているのです。自分の罪深さに…。そして、イエスに対してこう言うのです。「だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」と。この時に彼はイエスがだれなのかが分かるのです。そして、何をしましたか？「:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」と主にあわれみを求めるのです。「:43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」、彼は十字架の上でその6時間の間で信仰に至るのです。救いに与かるのです。

今、私たちがこの人物を見た時に気付いたように、彼は自分の罪深さに気づきイエスがいったいでれなのかに気づき、そして、この方の前に心を開き救いを求めるのです。そのことを今私たちは見ているのです。神ご自身が働いて私たちから石の心を砕いてくださり、それを取り除いてくださると。エゼキ

エルはこのように言っています。エゼキエル書 11 : 19 「わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。」と。同じことが 36 : 26 にも繰り返されています。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」。

神に対して頑なで神に心を開かなかったその心を神は砕いてくださって肉の心、つまり、神の真理を受け入れる柔らかい心に神が変えてくださるといことです。

こうして神は罪人のうちに働くのです。そして、その罪人は「イエスさま、私はあなたを信じます。」と救いに与るのです。自分の罪が示されて、イエスがだれであり、いったい私のために何をしてくださったのか、そのことを神が悟らせてくださり、そして、そのすばらしい主が備えてくださった完全な救いを心から受け入れようと、神はそのように働かれるのです。「神さま、私を赦してください。私はあなたに背いてあなたに逆らって生きて来ました。」と、自らの罪を悔い改めて、この主を、私の身代わりとなって死んでくださりよみがえられた真の神であるこのお方を信じて、この方に従って行こうという決心に導かれていくのです。これが神が罪人を救いへと導かれるときに為される神のみわざなのです。

さて、ここまで話して、今から非常に過激なことを言います。「私たちは人を救うことは可能である」と、慌てないでください、どう意味なのかを説明しますから。どうすれば私たちは人を救うことができるか？もし、私たちが人々が欲しがるものを約束したら、当然、聞いている者たちはそれが「欲しい」という思いを確実に抱きますね。例えば、信じたあなたが「成功します」「お金持ちになります」「病気がいやされます」「悩んでいる人間関係が上手くいきます」「有名な人になります」「幸せになります」「成績が向上します」、そして「天国に行けます」と言ったなら、是非、信じてそれを手にしたいという人が起こるでしょう。でも、この信じるというのは、言われたものが魅力的でそれを「欲しい」と言っている訳です。だから、イエスを信じたなら、こういうものをあなたは手に入れることができるのです「信じませんか？」と聞かれたとしたら、「はい」と答える人がいるはずです。もし、それが救いだとするなら私たちは人を救うことができるのです。人々が欲しがるものを与えると約束すれば、当然、人々はそれを求めるからです。しかし、私たちが考えなければいけないのは、それが神が与えてくださる救いなのかどうか？ということなのです。

主は我々人間が欲しがっている様々な物を「信じたなら与えられる」ということを教えているのでしょうか？却って、イエスを信じることによって様々な困難があなたにもたらされるということを知っています。逆に困難が約束されているのです。マタイの福音書 10 : 22 には「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」と書かれています。そのことは聞いていなかった、イエスを信じることによってすべての人に憎まれる？それはちょっと困る…と。でも確かに、イエスはそのように言われたのです。また、同じマタイ 10 : 34-39 にもこのように書かれています。「:34 わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。:35 なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。:36 さらに、家族の者がその人の敵となります。:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。:38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。:39 自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとしします。」と、イエスはこのように救いのメッセージを語ったのです。神の招きのことです。「わたしを信じたならわたしはあなたに困難を約束しましょう。わたしを信じたなら、あなたは一番愛する家族の関係においても、神に逆らう家族はあなたに反対するでしょう。敵になるでしょう。」と言われたのです。

また、マタイ 5 : 11、12 でも同じことを言われています。「:11 わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。:12 喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」、皆さん、イエスが私たち罪人を救いへと召してくださる時にイエスがお与えになった福音のメッセージは、イエスを信じることによってあなたには大変な困難が訪れるということなのです。確かに、幸せとか天国、罪の赦しはイエスを信じた者に与えられます。しかし、それは救われた者にもたらされる結果なのです。「信じる」ということには覚悟が必要なのです。私たちがこれまで信じて来たご利益宗教とは違うのです。私たちはこれを信じたなら何をすることができるか、これを信じたなら何をもらえるのか、そのことによって選択しますが、イエス・キリストを信じる信仰というのは、何をもらうかではなくて「何を犠牲にするか、何を捨てるか？」です。それが救いなのです。

イエスが言われたように、「:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。:38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」と、何のことを言っているのでしょうか？父や母を愛してはならないということではありません。父や母を愛することはみこころに適っていることです。言われていることは「あなたの愛する父や母よりもわたしを愛するか？あなたの愛する息子や娘よりもわたしを愛するか？あなたにとってわたしがナンバーワンか？あなたはわたしを一番に愛するか？」です。確かに、福音宣教をしても信じる人が少なくて期待通りの結果が現れない…、それは現実かもしれません。だからといって、私たちは福音を変えてもいいのではありません。

この罪人の救いというのは、人間の知恵や力によってもたらされるものではありません。でも、今見て来たように、人を救おうと働いている人間の知恵を見ます。神が救うと言われているのに、私たちが救われやすい福音を語るのではありません。これは人間の力や知恵によって人を救おうとしていることです。そんなことを神はお喜びにならない。「救いは神の恵み」なのです。神が罪人を招いてくださるのです。そうして人は救いに与るのです。私たちがすべきことは、そのメッセージがどんなに人間的に考えて救いに導かない、救われる人がいないのではないかと思わせるようなものであったとしても、私たちはそのメッセージを語り続けることが必要なのです。

皆さんとぜひ見たいのはマタイの福音書19章です。一人の若者がイエスのもとに来ます。16節に「すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。…」とあります。並行箇所のみか18:18を見ると「またある役人が、イエスに質問して言った。…」と書かれています。ですから、この人物がどういう人なのか、ある程度の情報を得ることができます。この人は、先ず「若かった」、二つ目にこの人は「役人であった」、三つ目にこの人は「非常に裕福な人であった」と、このことをみことばから知ることができます。「役人」とはどのような意味か？恐らく、ユダヤ人の会堂においてリーダー的な立場にあったのでしょう。責任ある地位に就いていた人物、大変熱心なユダヤ教徒だったのでしょう。この人物がイエスのもとに来るのです。そしてこう尋ねています。マタイ16:19「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」と。

この人は何のためにイエスのもとに来たのでしょうか？救いの必要性が分かっていたからです。救われる必要があることを知っていたからです。でも悲しい現実、彼は救いに関する神の真理が分かっていたのではありません。この人が思っていたことは「行いによってこの救いを得ることができる」でした。そのように信じています。だから「どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」と聞いています。「永遠のいのちを得るためにどんな良いことをしたらいいのか？」と、私たちが気付くことは、この人物は自分の罪深さに気付いていないということです。

この人物はイエスの許に来て「イエスさま、私は永遠のいのちを得たいのです。私は罪深くて永遠の滅びに向かっていてそれから抜け出す術もなく絶望の中にいます。あなただけが希望です。あなただけが救い主ですから、どうか私をあわれんでください。」とそのような思いで来ていません。イエスはこの人物の心をご存じです。そこでイエスはこの人物に自分の罪深さに気付かせようとするのです。マタイ19:17をご覧ください。「イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」と、敢えて、イエスがこんな言い方をしたのは、この人物に自分はいかに神の前に罪深い存在であるかということに悟らせるためにです。ですから「戒めを守れ」と言ったのです。

思い出してください。モーセの律法が与えられたときにその与えられた目的は、神の基準が示されることによって私たち一人ひとりがその神の基準に達していないことを悟らせるためでした。神が「こうしなさい。こうしてはいけない。」と言われたときに、私たちはそれらをことごとく犯している、それを破っている、そのことを私たちに気付かせるためです。イエス・キリスト以外、だれ一人として神の律法を守ることでできる人はいません。ですから、私たちは神の基準から外れているのだということに私たち自身が悟るために律法が与えられたのです。そこで、この人物にイエスがされたことは同じなのです。「神の戒めを守りなさい」と。19:18-20「:18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。:19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」:20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」、お気付きになったのでしょうか？イエスは敢えて、「私は神の戒めを守っていない」とそのことに気付かせようとしてこのように言われたのに、この人物は「私は戒めの全部を守っています。まだ何かが必要なのでしょうか？」と返しています。だから、この人物はいかに自分は神の戒めを犯しているのか、神の命令に逆らっているのか、そのことに気付いていないのです。

そこでイエスはこんなことをこの青年に言います。21節「イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」と。「完全になりたい」とは「救いに与りたい」ということです。イエスはこの人物のことをよく知っておられました。つまり、この人物にとって最も大切なものがいったい何かをご存じだったのです。知らなかったのはこの本人です。そこでイエスは彼にそのことに気付かせようとするのです。

もちろん、皆さんお分かりのように、ここで持ち物をすべて売り払うという行為によって救われるということを教えたのではありません。どんな行いによっても私たちは救いに与らない。イエスはこの人物に彼にとって最も大切なもの、本当に大切なものは何なのかを彼に気付かせようとしたのです。言い方を変えると、彼にとって一番大切なものは神ではないということを彼に気付かせようとしたのです。ですから、イエスは彼にとって大切な財産よりも、主イエスを愛するかどうかを彼に尋ねているのです。もし、永遠のいのちを得たいと思うなら、必要なことは「神を心から愛すること」だと言われます。では、あなたに尋ねることは「あなたにとって最も大切なものは何か?」、神なのか、それともあなたの宝である財産なのか?「わたしのために喜んであなたの愛する財産を捨てることができるか?」と、つまり、この財産よりもわたしを愛するかということです。この人物は22節にあるように「ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。」と、つまり、この人物が選択したのは神ではなかったのです。彼が選択したのは財産だったのです。イエスの問い掛けは何だったのか?「この世のすべてのものよりもわたしを愛するか?」でした。もっと言えば、あなたが最も愛するあなた自身よりもわたしを愛するか?です。神を第一に愛すること、これは律法の中でも最も大切な戒めだとそのように聖書に記されています。

律法を熟知していたはずのこのユダヤ教のリーダーの選択は悲しいものでした。神よりも彼は財産を選択したのです。永遠のいのちの大切さを知っていながら彼はその永遠のいのちを選択しなかったのです。主はそのことをご存じでした。でも、彼がそのことに気付いていなかったのです。このような大変悲しいことが記されています。その後を見てください。25節「弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」、確かにそう思うでしょう。イエスはこのように言われています。26節「イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」。あなたや私が救われたのは私たちの知恵によるものではありません。私たちの力によるのではないのです。神によってこの救いに私たちは招かれたのです。神が救いのみわざを成してくださったのです。ですから、イエスが言われたことは「人間にとって、また、人間の力でこの救いに与ることは不可能だ。」です。でも、イエスが言われたように「しかし、神にはどんなことでもできるのです。」と、神はどんな罪人でも救うことがお出来になるのです。

救いは確かに神のみわざであると、神がその人の心に働かれることにより、その人は自分の罪に気付かされ、そして、そんな自分を愛してくださった主の愛に感動と感謝を覚え、その主を心から何ものよりも愛したいという思いをもって主を信じるのです。このようなすべてのことが神の為される救いのみわざなのです。

続けて見てください。27節から「:27 そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」、気付いていたきたいのは「私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」というペテロのことばです。一人の宗教家で非常に裕福な青年、役人は神に何もかも捨てることはできなかつたのです。イエスは「あなたにとって大切な財産を捨ててわたしについて来なさい」と言ったのです。でも、それができなかった。

ペテロは思ったのです。「我々はすべてを捨ててついて来た。では、我々には何がいただけるのか…」と。この会話の中でペテロはこのような質問をするのです。「私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」と。日本語では「何もかも」と訳されていますが、「すべて」です。私のすべてをあなたに捨てて来たと言うのです。

同じことばが29節に出て来ます。「:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」、すべてを捨ててそこから離れなさいということを行っているのではありません。先ほども見たようにイエスが言われていることは「あなたが最も愛するものよりもわたしを愛するか?あなたにとって主が第一か?」と、そのように問われたのです。ペテロは「私たちは、何もかも捨てて…」と言いました。「私たちにとって大切なものよりも、神さま、あなたが大切です!そして、あなたを信じてあなたに従って来ました。」と。

27節でペテロが「私たちは何もかも捨てて従って来ました。」と言い、29節でイエスは「わたしの名のために、…捨てた者はすべて、」と言われました。そこに神のすばらしい祝福があるということで

す。ペテロたちはあの若い役人とは違って、すべてのもの、つまり、財産やこの世のすべてのものよりも、そして、自分自身よりも主を愛することを決心したのです。それが彼らだったのです。

ペテロは27節で「私たちは、何もかも捨てて、あなた従ってまいりました。」と、非常におもしろいことばを使っています。ペテロは自分たちの証をするのです。イスカリオテのユダを除いて。彼はそうではなかったからです。自分たちはすべてを捨ててあなたに従って来ましたという告白に対してイエスはこのように言うておられます。28節「:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」、つまり、イエスが地上に帰って来られたとき、千年王国を築かれるとき、このような祝福があるということを使ったのです。

皆さんに注意していただきたいのは「わたしに従って来た」ということばです。なぜこれが大切かと言うと「従って来た」というこのことばの時制が不定過去なのです。なぜ、この時制をここで使っているのか？イエスは「それがこの人たちの特徴だったから」と言われているのです。イエスはこのペテロたちをよく知っていました。彼らは確かに、すべてのものよりも自分自身よりも神を愛してすべてを捨ててイエスに従って来たのです。その歩みを見た時に、もちろん失敗もあったことは知っています、でも、彼らはこの主に従い続けたのです。それがこの人たちの特徴だったのです。なぜなら、彼らは救われていたからです。彼らは自分の思い込みで救われていると思っていた未信者ではなかったのです。彼らは確実にこのすばらしい神の救いに与っていた者たちなのです。それが証拠に、彼らはすべてのものよりも神を愛し、その神に対し従い続けて行こうとした、そのように生きていたのです。

そうすると、私たちは、ここにおられる多くの皆さんは、ご自分が救いに与っているとそのように信じていると思います。でも、今日私たちが見て来たように、信じていると思込んでいる人たちの中に、救われていない人たちがいるということです。私たちはこのことを何度も見て来ました。今日はもっと先に進むはずでしたが、進めないのはどうしてもこのことを皆さんに伝えたいからです。皆さん一人ひとりが確信をもって「私は救いに与っている！」と、そこに到達しなければいけないからです。

みことばが教えてくれたように、あなたはただ天国に行きたいからイエスを信じたのか？イエスを信じることで何かを得ることができる、だから信じたのか？それとも、この方が神であられ、この方が唯一の救い主であり、私たちのように罪深い者にとっての唯一の希望であり、この方を信じてこの方に従って行く。すべてのものよりも自分よりもイエスを愛してこの方を受け入れてこの方に従って行く、そのような決心をしてこの救いに与ったのかどうか？です。見て来たように、そのような決心に至る過程はすべて神が為されるみわざです。あなたに罪を示してくれたのも神だし、イエスがだれかを示してくれたのも神だし、そして、それを悟らせてくださってこの方を信じていこうと、その決心さえも神が働いてくださったのです。問題は、そのようにしてあなたは救いに至ったかどうか？です。問題はそこなのです、兄弟姉妹の皆さん！あなたが考えなければいけないのはこのことです。

救いは神の恵みです。そして、罪人のうちに神はこのように働くのです。そして、救いへと導いてくださる。その救いに与っているならあなたは失敗しながらでも神に継続して従っていこうと、そのように生きていくはず。あなたはそんな人物ですか？それとも救われていると思込んでいるだけの人ですか？これはあなたの永遠に関することです。自分の心に是非問い掛けてみてください。そして、今日皆さんがこの場を去る時には、あなた自身の救いを確信してここを去ってください。聖書は私たちに何を教えてくれているのか？神はあなたや私のうちに働き、罪の中にいた私たちをご自分の許へと召してくださった、これが救いだということです。

この救いに与っているひとり一人はその救いに与ったことを感謝することです。あなたのわざによって救いに与ったのではない、神の恵みによって救いに与ったのです。だから、私たち生かされている間はそのことを感謝しながら、その方のすばらしさを伝える者として生きていくのです。どうか、そのようにこの一週間も歩み続けましょう。何よりもすばらしい主を誉め称えながら、感謝しながら、この方が喜ばれるように歩み続けて、私たちの感謝を現わしていきましょう。